

受難の主日 (ルカ 23:1-49)

御父は和解の道のりを見守っておられる



四旬節中、ミサの奉献文に「ゆるしの奉献文(二)」を使うようにしてきました。この奉献文には「人類の和解」という明確なテーマがあります。この奉献文中で中田神父が第一に祈ってきたことは、ウクライナとロシアの人々の和解です。敵対することをやめて、和解できるように、和解のその時まで、私はこの奉献文を使い続けようと思っています。

「ゆるしの奉献文」の中に「キリストこそ救いのみことば、罪人に差し伸べられる手、まことの一致への道です」という祈りがあります。和解のためには敵対する両者が手を取り合わなければなりません。両者の手を握らせるのが、まことの一致への道であるキリストなのです。

和解のためには、敵対する両者が歩み寄らなければなりません。今日の受難の朗読の中でも、指導的立場にある人、群衆、イエスを信じる人々、すべてがイエスに引き寄せられています。イエスこそ、まことの一致への道です。どのような形であれ、イエスに近づき、歩み寄らなければ、一致点は見いだせないのです。

本日朗読された「ルカによる主イエス・キリストの受難」は、御父の側から和解の道を見守っておられると感じます。「和解のいけにえ」として差し出されたイエスの姿を、私たちは朗読を通して辿ってきたのです。イエスは「和解

のいけにえ」なので、ご自分を弁護しません。

ちなみに、聖金曜日の「ヨハネによる主イエス・キリストの受難」は、御子イエス・キリストのほうから和解のために手を差し伸べる描き方です。イエスから語りかけられるたびに、兵士と千人隊長、大祭司、総督、ユダヤ人たちが和解の席に着き、導かれていくのです。

もちろん、完全に導かれ、過ちを認めるものではありません。それでもイエスは和解のために最後まで力を尽くされ、人間の努力で足りない部分は、ご自身の命によってあがなってくださいました。ロシアの戦争行為も、人間の反省だけでは和解にたどり着けません。人間の努力で足りない部分を、今もイエスはご自分の命であがなってくださるのです。

本日受難の主日は、聖木曜日、聖金曜日の典礼に参加できない人のための典礼でもあります。イエスこそ、自分たちの言い分を一步も引かずに歩み寄れない人たちの一致への道です。イエスこそ、過ちを認めることのできない弱い人間を和解させる救いの手です。イエスの力により頼みましょう。

和解は、目に見える形では敵対する人が近づき、手を取り合うことで実現しますが、見えない部分ではイエスの力がなければ実現しません。この一週間、御復活の日まで「救いのみことば、罪人に差し伸べられる手、まことの一致への道」であるイエスに祈り続けましょう。和解の席に、人類すべてが座ることができますように。